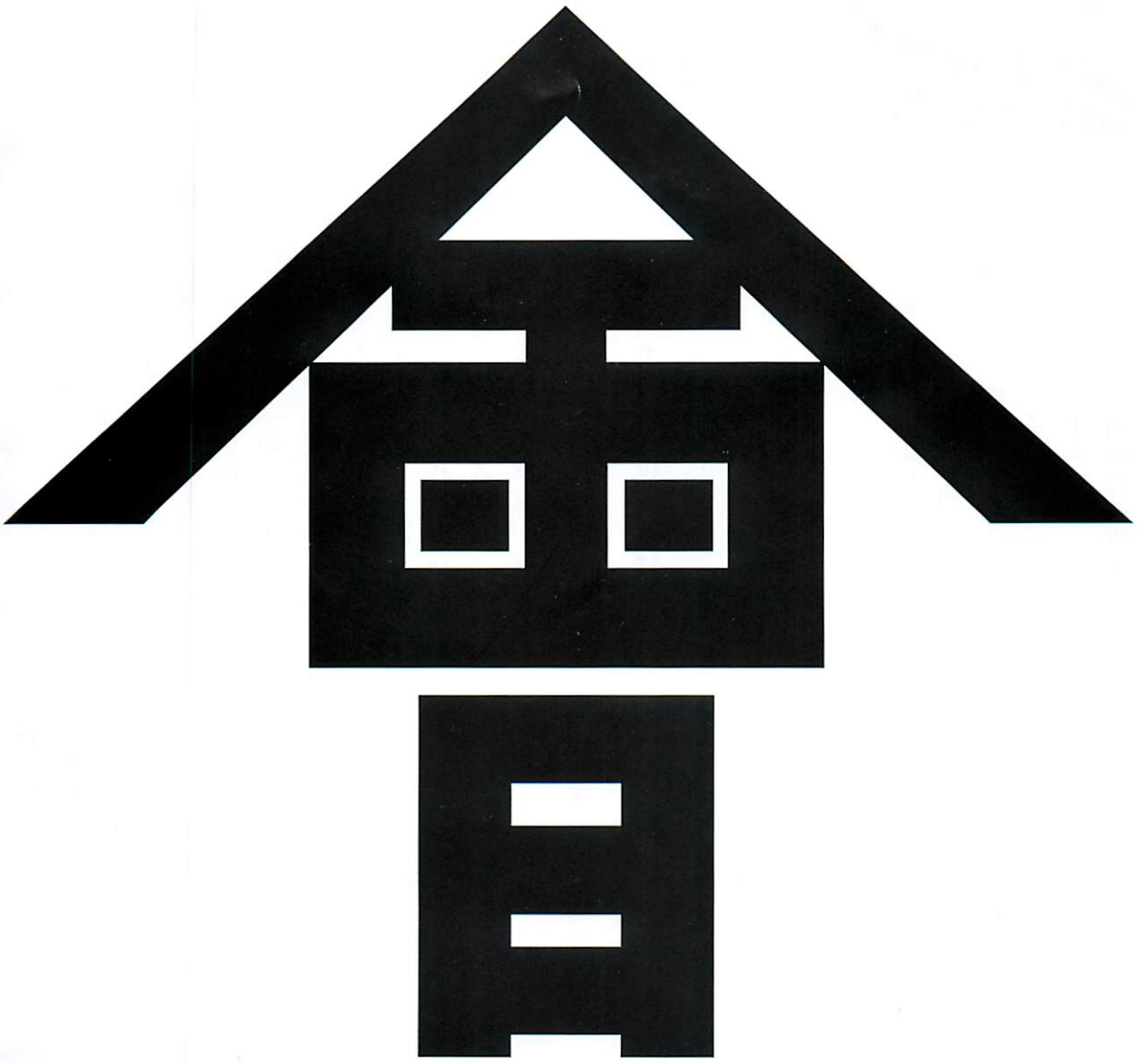
標津町内に眠る会津藩士の足跡



標津町歴史文化研究会

会津藩士の墓整備活動にご支援頂いている企業・団体等

海・山・川・大平原がおりなす感動の大地
標 津 町
ふるさと納税のご相談は標津町役場0153-82-3674まで

ぷるけの湯宿 ※「ぷるけ」とは「湧き出る」を意味するアイヌ語です。
ホテル川畑
料金：8,100円～　TEL 0153-82-2006

アットホームな旅の宿
よしだ旅館
料金：6,480円～　TEL 0153-82-3516

標津の前浜寿司・ラーメンほか
あけみ食堂
昼：11時～14時　夜：17時～24時
TEL 0153-82-2366

さけ・いくら・たらこ
標津漁協直売所
9時～16時30分(日曜休)　TEL 0153-82-2035

ガソリン・灯油・プロパン
標津アポロ石油(株)
TEL 0153-82-2050

標津町に眠る会津藩士の足跡

２０１３年にＮＨＫで放映された大河ドラマ『八重の桜』は、会津藩による京都守護から会津戦争、そして明治以降、旧会津藩士とその家族達がいかに生きたかをテーマに描かれたドラマでした。このドラマ前半で描かれた幕末の頃、会津藩は現在の標津町に拠点を定め、別海町西別から紋別市までの領域を領地とし（一部は幕領警衛地）、藩士とその家族を動員しての北辺防衛と開拓にあたっていました。この幕末会津藩による北辺防衛の歴史は、当時動乱の渦中にあった会津にはほとんど記録が残されておらず、会津ではあまり知られていないそうです。

標津町指定文化財
『御陣屋御造営日記』
（標津町ポー川史跡自然公園所蔵）

史料の乏しい中、当時の歴史を探る鍵となる史料が三つあります。一つは現在、標津町ポー川史跡自然公園で展示公開されている、標津町指定文化財『御陣屋御造営日記』です。この日記については、かつて標津町で活動していた標津町郷土史研究会の長年の調査研究により全文が解読され、現在の標津市街地南に位置するホニコイと呼ばれる地区に、会津藩が陣屋を築いていたことが明らかにされています。

二つ目の史料は、現在野付半島を通る道路脇に置かれ、『会津藩士の墓』として標津町指定文化財となっている二基の墓石です。この内の一基には、正面に「稲村兼久之墓」と「同孫女之墓」右側面に「文久三歳仲春廿之二（文久三年三月二十二日）」、そして左側面に「陸奥會津之産士部津詰」の文字が刻まれています。会津藩領となった標津での、初期の警衛・開拓に従事した藩士とその家族だったのでしょう。この墓に対しては、昭和４３年に自衛隊と標津町により『北辺防衛会津藩士顕彰碑』が建立され、会津藩による北辺防衛の歴史の事実を示す物的証拠として、今も大切に保存されています。

そして三つ目の史料は、新潟県西厳寺が所蔵する、通称『標津番屋屏風』です。この屏風は今からおよそ１５０年前の標津神社付近を描いたもので、会津藩の絵図面方として蝦夷地に派遣された一ノ瀬紀一郎という人物が、文久二年に描いたスケッチを基に、会津藩の絵師星暁邨が元治元年に屏風として完成させたものと考えられています。

これまでの調査により、この屏風に描かれた人物の中には、文久二年より標津で代官を務め、後に秋月悌次郎らと共に奥羽越列藩同盟締結に向け東北中を奔走することとなる南摩綱紀と、野付の通行屋で通辞を務め、文久二年当時標津場所支配人となっていた加賀屋伝蔵の二人が描かれていることが明らかとなっています。そしてこの屏風に描かれた場景は、当時政務の要であった南摩と、経済の要であった伝蔵を左右に配し、標津川での鮭漁が豊漁な様子と、蝦夷地の豊富な木材資源の様子を表現したものであり、会津藩が新たに手に入れた蝦夷地の領地における資源の豊かさを伝えているように見えます。

『御陣屋御造営日記』をはじめ、各種史料を見る限り、当時の会津

標津町指定文化財
『会津藩士の墓』
（標津町字茶志骨所在）

上)『標津番屋屏風』(新潟市西厳寺所蔵)
会津藩が標津を領地としていた文久二年秋の様子を描いた屏風。秋深まる季節、標津川に遡上した鮭を水揚し、「山漬け」に加工する様子が描かれている。絵の中央にある社には「士部津三社」と記されたのぼりが掲げられており、現在の標津神社の前身であることがわかる。神社の位置は昔も今もほぼ変わりなく、今も神社境内に行けば絵の中にある大碇をみることができる。

左)会津藩元陣屋跡地
幕末に会津藩が陣屋を築いたと推測されている場所。元々古い時代のアイヌのチャシ(砦)があった場所で、チャシ跡を再利用して陣屋が築かれたと考えられている。

藩の状況は社会的にも財政的にも非常に苦しい時期でした。そのような状況下で制作されたこの屏風には、蝦夷地に派遣された会津藩士が、北の大地の豊かな資源を目の当たりにした時に描いた、新時代への希望が込められているのではないかと推測されています。そして当時、京都守護職として京都で重責を担っていた、藩主松平容保公の心労を和らげるため、屏風完成後は藩主の下に送られていたのではないかと考えられているのです。

北海道の東の外れ、標津町に残る会津藩士達の足跡。そこからは歴史の表舞台に現れることのなかった、もう一つの幕末史の存在を読み解くことができます。

関連図書のご案内

①会津藩蝦夷地御領分シベツ元陣屋創建一五〇年記念
『北辺の会津藩旗』～幕末会津藩史外伝～

編集・発行：標津町歴史文化研究会

野付ネイチャーセンター、標津町ポー川史跡自然公園ほかにて限定販売中

1冊５００円(税込)

②季刊『会津人群像』2015 No.31
特集「知られざる幕末会津藩北辺防衛の歴史」

編集・発行：歴史春秋社

2013年に標津町で開催された特別展「知られざる幕末会津藩北辺防衛の歴史」と同展示会期間中に行われたシンポジウムの内容を基に編集された特集号。

1冊1,200円+税

※『会津人群像』は全国書店にてお求めください。

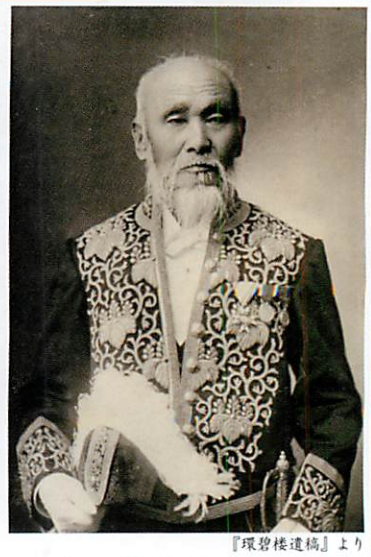
幕末会津藩北辺防衛の歴史を彩る四人の人物

馴つつも
遊ふ小蝶の
羽風こそ
内兎にも
恙しく軒の立花

一ノ瀬紀一郎作「蝶」
加賀家文書(別海町所蔵)より

三重県松浦武四郎記念館提供

加賀家文書(別海町所蔵)より



『環碧楼遺稿』より

南摩綱紀(なんま・つなのり)

文政六年（一八二三）若松城下で生まれた会津藩士。幼名は三郎、字は士張、諱は綱紀、号は羽峯、通称は八之丞と称した。幼少より聡明な子と知られ、八歳の頃には四書を読みこなしたという。藩校日新館では秋月悌次郎と並ぶ秀才と称された。文久二年（一八六二）四十歳の時に藩命により蝦夷地代官兼勘定奉行として標津に赴任する。六年の歳月をこの地で過ごし、現在に続く標津町の「まち」としての礎を築く。任期満了後、戊辰戦争が始まり、奥羽越列藩同盟設立に向け、東北諸藩の間を駆け巡る。明治に入ってからはその才覚を買われ、太政官への抜擢、東京大学教授、高等師範学校教授などを歴任した。明治四十二年（一九〇九）四月十三日、病により死去。現在は妻竹子と共に東京日暮里の谷中霊園に眠る。

加賀屋伝蔵(かがや・でんぞう)

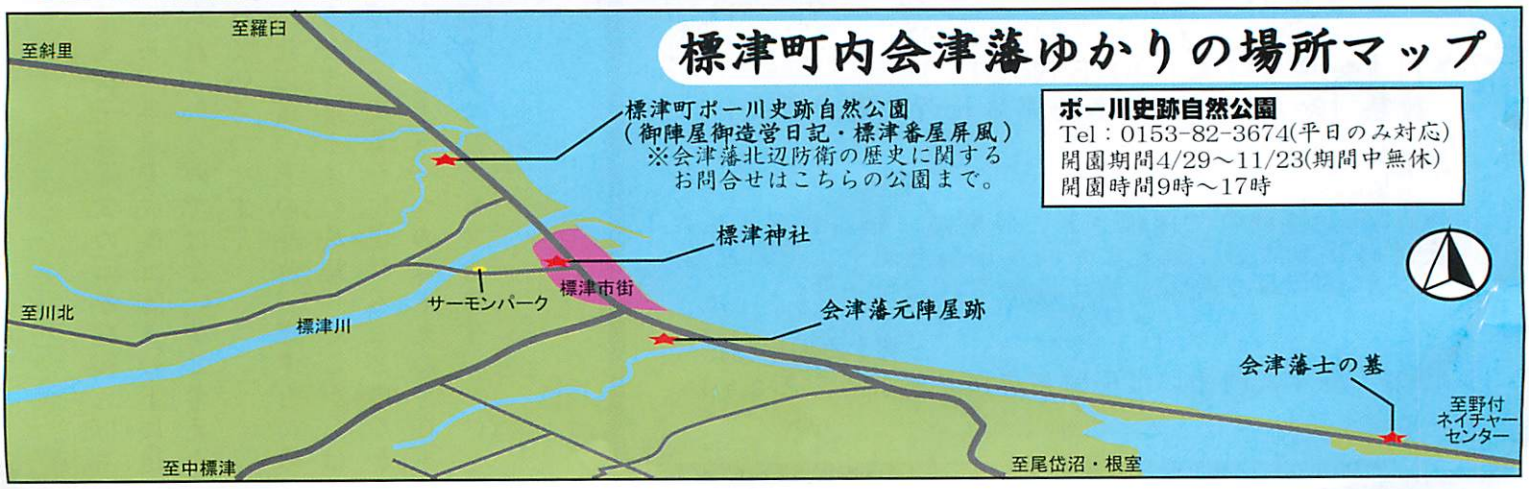
文化元年（一八〇四）羽後国八森村（現在の秋田県八森）で生まれた。父親の初代徳兵衛が加賀国出身であったため、加賀性を名乗り、代々蝦夷地へ渡り場所請負人の下で働く。加賀家三代目となる伝蔵は、文政五年（一八一八）十五歳の時に蝦夷地に渡り、クスリ（釧路）場所で飯炊き、帳場（事務）手伝いをしながら地元アイヌらと交流を深め、アイヌ語を取得した。天保年間（一八三〇～四四）にノツケで止宿守、通辞を勤めた後、万延元年（一八六〇）、標津が会津藩領となってからは、標津場所通辞、文久二年（一八六二）には支配人となった。その人柄の大きさから、南摩綱紀、一ノ瀬紀一郎ら会津藩士や、松浦武四郎から慕われ、交友を深めていたことを示す数々の記録が残されている。明治七年（一八七四）享年七〇歳で死去。

松浦武四郎(まつうら・たけしろう)

文化十五年（一八一八）伊勢国一志郡須川村で生まれた、幕末から明治にかけての探険家、絵師。雅号は北海道人（ほっかいどうじん）。北海道の名付け親として知られる。蝦夷地を六度探検し、数々の記録を残してた。幕末から明治にかけ、加賀屋伝蔵や南摩綱紀と交友を深めており、三重県大台ケ原にある武四郎の分骨碑には南摩の撰文による碑文が刻まれている。標津には三度訪問しており、その二度目の訪問となる安政二年（一八五五）の年、標津川のほとりで次の詩を詠んでいる。

稙(あき)もはや　日数(ひかず)へにけん　しべつ河
せにつく鮭の　色さびにけん

一ノ瀬紀一郎(いちのせ・きいちろう)

天保六年（一八三六）、若松城下で生まれた。幼名は鬼一、顕悟、通称は奇逸楼、紀一郎など、諱は重村、重邨、画号は暁川（ぎょうせん）と称した。さらに戊辰戦争期以後は雑賀孫六郎と名を変えている。会津藩の絵師星暁邨を師に絵を学び、安政元年（一八五四）には幕吏平山謙二郎の従者として蝦夷地を巡回。各地の風景を写生した『蝦夷廻浦図絵』を残した。万延元年（一八六〇）、標津が会津藩領となった際には、初代代官を務め、また絵図面方としてヲムシャの様子を描いた絵や、地理産物を記録した『北辺要話』を残している。戊辰戦争の折は、榎本軍に入って開陽丸に乗り込み、大阪から徳川の古金十八万両を移送したともいわれる。明治期は北海道開拓使として室蘭港開港などに尽力した。

標津町内会津藩ゆかりの場所マップ